岸田文雄著

『核兵器のない世界へ　勇気ある平和国家の志』

2020 年 10 月 15 日　日経 BP 出版

はじめに

二〇二〇年初春、世界は突然、それまでに出会ったこともない新しい難敵と向き合うことになりました。

新型コロナウイルスという目に見えない相手は、瞬く間に人類社会に未曽有の災いをもたらし、多くの尊い生命がその犠牲となりました。それだけでなく、コロナウイルスはグローバル化が進んだ二十一世紀の国際社会や国境を越えた幅広い経済活動、そして、多くの成熟した市民社会を無造作に踏みにじり、無慈悲に分断し、人類社会全体を暗い絶望の淵へと追い込んだのです。

人類が目に見えない恐怖と戦ったことは過去にもありました。その時の相手はウイルスのように自然界が生み出したものではなく、人間が人為的に作り出した核兵器がもたらす破壊力と放射能という敵でした。

一九四五年八月六日には広島で、その三日後の八月九日には長崎で多くの無辜の人たちが突然、この見えない敵に襲われ、尊い生命を一瞬にして奪われたのです。

この本を執筆している二〇二〇年秋、人類はまだ、コロナウイルスとの闘いに明確な勝機を見い出せてはいません。一方で、人類はその英知を結集して、この目に見えない敵を打倒する方策を日夜を通じて探しています。

日本だけでなく、米国や欧州、そして中国をはじめとするアジア各国でも様々な取り組みがなされ、また、その知見を皆が共有することで人類は文字通り、心と力を一つにしてこの戦いに挑んでいるのです。

翻って、敵をせん滅するため、人間の生命を非人道的な形で奪い去る核兵器との「戦い」はどうでしょう。

もちろん、これまでにも何度か、この悪魔の業火を生み出す異形の兵器を地球上から無くそうとする試みはありました。しかし、そのいずれもが残念なことに長続きはしませんでした。さらに言えば、この課題に世界中の人たちが心を一つにして向き合い、この戦いに力を結集して挑んだこともまだありません。

核兵器がもたらした禍々しい放射能の傷跡は広島、長崎における被爆者を数十年以上にわたって苦しめ、かつ、その子供世代、孫世代にも謂れのない重荷を背負わせています。核兵器がもたらした災いとの戦いは半永久的、あるいは未来永劫、続いていくと言っても過言ではないのです。

人類がこれまでにも何度か体験してきた「パンデミック（世界的な感染症の拡大）」の一種であるコロナウイルスの蔓延はいずれ、人類が英知を結集することで克服できる

ことでしょう。

同様に「核兵器を世界から全て無くす」という戦いにおいて、人類がいつの日か、力を一つに合わせていくことができないはずはない、と私は信じています。そして、広島・長崎の悲劇を人類が二度と繰り返さないための戦い、言い換えれば「核兵器のない世界」を目指す試みは、そうすることによって初めて勝機が見えてくるのではないのでしょうか。

本編でも触れているようにロナルド・レーガン、ミハイル・ゴルバチョフ、そしてバラク・オバマといった指導者たちがこれまで幾度となく、「核全廃」という名の松明を掲げ、それに向かって挑戦してきました。しかし、その勇気ある行動は常に国際政治における厳しい現実によって翻弄され続けてきました。

その松明の灯が弱く、細くなっている今、それを誰が引き継ぎ、誰につないでいくのか——。

そう、考えた時、私は迷うことなく、その松明を「この手にしっかりと引き継ぎたい」と思いました。単に広島県選出の国会議員というだけでなく、核兵器がもたらす非人道的な災いを再び、この地球上にもたらすべきではないと誓っている日本人の一人として、私はそう心に誓ったのです。

唯一の戦争被爆国である日本の責任ある政治家として、私はこの松明を自分なりに高々と掲げたいと思っています。そして、同じような想いを胸に抱いている世界中の人たちの羅針盤となり、道標となりたいのです。

本書はそうした私の想いを自分なりに文字にしてまとめたものです。この本を読まれた方が一人でも多く、私と共に心を一つにして「核兵器のない世界」に向けて前に一歩でも踏み出して頂ければ、筆者としてこれに勝る喜びはありません。

二〇二〇年秋　岸田文雄

目次

はじめに 2

第一章 故郷・広島への想い 11
生い立ちと家族 12
ニューヨーク時代 15
四賢人のビジョン 20
プラハ演説 26
分断から協調へ 34
運命の訪問 40

第二章 保守本流の矜持 65
池田勇人と宏池会 66
広島県というルーツ 68
戦後保守の源流 73
吉田ドクトリン 78
リベラル派の矜持 85
宏池会のリアリズム 87
憲法改正について 96

第三章 核廃絶のリアリズム 107
米朝電撃会談 108
失われた三十年 116
CVIDを巡る応酬 121
核超大国・中国 132
ロシアの核偏重 141
変わるNPR 150
ブッシュ・ドクトリンの影 154

第四章 核の傘と非核三原則 169
核の先制不使用 171
「核の傘」を巡る葛藤 179
密約外交の功罪 183
「日本核武装論」の虚実 192
脱・密約の時代 199
爆弾発言の底流 205

第五章 岸田イニシアティブ 215
核兵器禁止条約を巡る逡巡 217
NPTの守護神として 224
日米拡大抑止協議 235
李下の冠 244
「核兵器のない世界」に向けて 255
ローマ教皇のメッセージ 263

おわりに 270
あとがき 276